



Title	待てない私たちが待つために：7人の発表者へのコメントとして
Author(s)	伊藤, 崇
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 69-72
Issue Date	2014-12-05
DOI	10.14943/rcccd.6.69
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57573
Type	bulletin (article)
File Information	AA12203623_06_69-72.pdf



[Instructions for use](#)

待てない私たちが待つために： 7人の発表者へのコメントとして

伊藤 崇*

1. ゴドーを待てない私たち

シンポジウムの発表者に対するコメントをしなければならないのだが、当日は司会としてはほとんど仕事をしていなかったもので、いきなり、サミュエル・ベケットの話をしてみたい。

『ゴドーを待ちながら』のプロットは、観客にとって何だか分からないものをえんえん待ち続ける2人の男を通じて、近代という時代の不条理性、ひいてはそういう時代を生きる私たちに不安なるものの具体的な姿をつきつけるというものであった。

いま、この時代にベケットがいたとして、ウラディミールとエストラゴンがゴドーを待ったであろうか。

たぶん、待たない。その代わりに彼らがするであろうことを、とりあえず2つ思いついた。1つは、ゴドーをネットで検索すること、もう1つは、ゴドーを「作ってみた」することである。

いるはずだが、まだ会ったことがない。あるいは、まだ見たことがない。ベケットの近代人はそういう存在を待つという設定にまだ乗ることができていた。

現代のベケットは、もう待たない。と言うよりも、いるはずの人やあるはずのものの「出来(しゅったい)を待つ」という発想がしづらくなっていると言うべきであろう。その代わりに、膨大な量のデータベースにその存在の手がかりを探ったり、頭に浮かぶ理想のゴドーをなんとかロイドのように作ってしまったりするであろう。このようにして痕跡か偽物で事足りる時代では、待たれ

ていたはずのゴドーははじめから否定される。

なにも戯曲論をものしようというのではない。待つことができない、あるいは待つことが忘れられているというこの事実は、ディベロップメントという概念を再考するヒントとなるように思われるのである。

2. dis が否定するもの

ディベロップメントという語の指示する概念の再考という作業にあたり、その語の形式にまずは注目してみる。そのようなときにたいいてい参照される Oxford English Dictionary をここでもまた繙く。OEDによれば、名詞形 development の基となる他動詞 develop は、ロマンス語の動詞語幹 volup あるいは vilup に否定を意味するラテン語の接頭辞 dis がついた語である古いフランス語 desvolper あるいは desveloper に由来する。かつての vo(i)lup は現在のイタリア語には viluppare という形で残っており、その意味は、包むこと、束ねること、折り畳むこと、巻き込むことである。その反対は sviluppare で、ほどくこと、広げること、閉じこめていたものを解放するという意味であり、こちらが英語の develop に相当する。

develop という語が、元々はある状態の否定を意味していたことは気に留めておいてよい。現代イタリア語から推測するに、この語は、寄せ集められていたものがほどけてしまうというニュアンスであったのであろう。先に寄せ集められた状態があつて何らかの作用により後からそれが解ける

*北海道大学大学院教育学研究院

というイメージを、develop の de を否定の接頭辞として認識できたかつての人々はおそらくは思い浮かべたことであろう。

引き続き OED に目を通すと、この語の用例はその後の歴史の中でいくつかの変遷を遂げたことが分かる。その 1 つは、寄せ集められたものがほどけた結果として、その内部に隠れていたものが顕わになるというニュアンスに重点が置かれたという変遷である。例えばそれが生物の発生を説明するのに用いられた場合、有機体の胚珠に隠れた構造が発生の過程で次第にほどかれて顕わになるというイメージを伝える。また例えば土地の開発について述べるのに用いられた場合、その土地に変化を加えることで、その土地が元々もっていた財産としての隠れた価値が顕わになるというイメージを伝える。

このように develop は、寄せ集められて見えなくなっていた内部がほどかれて顕わになるという意味をもつようになった。ただ、この段階においてもまだ、develop に隠れた接頭辞 dis は何かか内部にとどめられることの否定（すなわち、その何かか顕わになること）として機能していた。

ひるがえって現代の私たちがディベロップメントという言葉を使い浮かべるとき、人々に共有されたなんらかの基準にそぐうようにあるものが変化していくというイメージをもちやすい。このことは、シンポジウムの発表者がそろって指摘した点である。例えば宮崎氏が挙げた鶴見和子の内発的発展論に対立する近代的パラダイム下でのディベロップメントとは、「経済」を価値観とする「国家」規模での「単線的」な成長を目指す活動であった。また、室橋氏が指摘するように、発達障害を「発達のしそこない」と捉える世間の見方が前提するのは、川田氏が指摘する「定型」的な発達の基準を想定した発想である。さらに、発達支援という言葉を用いる前提には、加藤氏が指摘するように、そうした基準に適合するよう発達をうながすことが可能であるという発想がある。

ディベロップメントについて現代の私たちがもつこうしたイメージにおいて、接頭辞 dis によっ

て否定されるものは何であろうか？

かつてこの語が喚起したイメージでは、「何かを寄せ集めておくこと」や「何かを内部にとどめておくこと」が否定され、その何かかほどかれたり、その結果として内部の何かか顕われたりすることが表現された。

それに対して現代の私たちが develop にもつイメージによって否定するのは、「内部にあるもの、それ自体」であろう。あるものの内部に何かがあるのだとして、顕わになるはずのその何かを別の何かに置き換えること。別の何かとは、私たちが基準とする良い発達の理想像である。

したがって、あるものの内部に実際のところ何かがあるのかをじっくりと観察することもなく、基準にそぐう行動類型を外挿するという態度が許容される。この態度が否定するのは、その者の内部に潜在するもの自体である。また、土地開発についてこの用法で develop を用いるならば、石岡氏の取り上げた「惨事便乗型資本主義」が採用する、ある土地やそこに住んでいた人々の生活に内在する価値を文字通り根こそぎにし、それを完全に否定した上で新たな価値を他所からもってくるという手法が相当する。

内部を別のものに置き換えるという発想が前提とする態度は、「すみやかな目に見える変化が価値あることだ」というものであろう。あるものの内部には、人々が共有する基準に適合する何かか潜在しているかもしれない。にもかかわらず、その何かを見出そうと試みることなく否定し、他所からその何かに相当するものをわざわざ外挿するならば、その行為の背後にある態度は、変化はできるだけすみやかに起こすべきだ、というものであると推測できる。言い換えるならば、内部に包み込まれていたものが顕われるまで「待てない」のである。

3. 私たちは待てない

私たちの「待てない」という性行は、ディベロップメントをめぐる様々な事象を形作る。子どもの

世話を思春期の子どもに任せる「異年齢カップリング」に注目するよう促した川田氏の指摘は、私たちがそうした育児の形を許容できなくなっていることを浮かび上がらせる。その背景には、思春期の子どもが子どもの世話をいざ始めようとしたときに、大人が同じことをするよりも余計な時間がかかるということがあるだろう。子どもに任せるより、大人がやった方が早いと思ってしまうのは、「待てない」ためである。

面白いことに、加藤氏の言うように発達中の「停滞」が様々なしくみによって引き起こされている時期に注目するならば、大人はこのように「待てない」にもかかわらず、幼児期や思春期の子どもは様々なことへの挑戦の機会を「待たされている」ことになる。待てない大人と待たされる子どもが同居することによって何が起るのか。逆に、大人と子どもが同居することによって半ば必然的に一方が待てない心理の状態に、他方が待たされる状態に至ってしまうのであろうか。

開発の文脈においてはその傾向はさらに顕著であろう。石岡氏が挙げたアジアのそれこそ「スカイロケットティング」な地価高騰は、投資家に機が熟すまで待つことを忌避させ、何にせよ即断を迫る。判断をためらった投資家が行き着く先は敗北なのであろうから。

宮崎氏が挙げる内部発展論は、ローカルなエコシステム内部の原理での成長を促すものである。地域にあって開発の即断を押しとどめる内的原理の一つは土着の人々の凝り固まった怨念のような人間関係である。複雑な人間関係の歴史を人々の経済成長への期待によって一時的に忘れさせたのが今までの開発思想であったとするならば、オルタナティブとしての発展論はもう一度複雑な人間関係に立ち戻った上でその「もつれ (viluppo)」を「解きほぐしていくこと (sviluppare)」を志向する。その過程は非常に時間がかかることが予想されるが故に、近代開発主義はそれを待つことができない。

このように挙げていくと、「待てない」私たちは、内部にあるものが内的な論理に従って顕れるのを

「待つ」という態度を取り戻すべきだと言いたくなる。シンポジウムのテーマに引きつけるならば、「待つ」という支援の方法を提案する、となりそうである。

4. それでも待ってみよう

しかし、ちょっと待ってみよう。待つという支援と言うと聞こえはいいが、マインドセットの大幅な転換が求められることが予想される。第一に、それは支援する側にもされる側にも非常に地道な努力をおしつける。水野氏は国民の体力を示す各指標における経年的推移を示し、ここ十数年は体力の向上または一定水準が保たれていることを報告している。そこで指摘されたように、学校や地域のスポーツ振興団体などが長年に渡り地道に体力の指導を行っていることがそうした結果をもたらしている可能性があるであろう。体力の落ちた私たちが、その身体を否定してサイボーグのようなパーツで置き換えようとすることは「待てない」私たちの性行に由来する。しかし有機体であるところの身体は正直であり、部位の換装は必ず有機体のエコシステムに綻びを生じさせ、かえって健康を損なうこととなるであろう。体力という身体のパフォーマンスひとつ取ってみても、働きかけを開始してから社会が望む結果が目に見える形で顕れるには、十年二十年のスパンで待つことが求められるのである。したがって、私たちに問われているのは、そこまでの時間的展望をもって働きかけをし続けることへの覚悟をもつかどうか、その妥当性に関する合意形成をするか否かという点である。

第二に、寿命をもつ人間はいつまでも待っていることができないため、個を超えた共同において「待つ」という活動を達成し続けるという実践の変革が必要となる。分かりやすい例は、障害を抱える子を支える家族の活動である。もしも、そうした子の生活の自立が家族、特に親によって達成されていた場合、その親が考える可能性のあることは、自身の死後もその子が生活を自立させ続けら

れるようにするにはどうしたらよいかという問題であろう。極端な場合は、生活の自立を可能にするための身体的、知的な諸能力をむりやりにでも習得させるよう、親が子に強く働きかけるというケースもあるであろう。親の視点に立つならば、「悠長に待っていることはできない」のである。

このような場合の問題は、待つ人がごく少数であることである。その問題を解決する1つの方法が、間宮氏が指摘するように、支援者と被支援者という二項関係を拡張し、もう一人の人を追加した「三角形」を作ることであろう。すなわち、待つ人を増やし、待つ行為を共同作業とすることである。

こうしたマインドセットの転換は、「待てない」現代の私たちにとっては、言うは易く行うは難し、の典型である。であるからこそ、せめて、ディベロップメントという概念の基にある develop という概念の、さらにその基底にある「隠された内部が展開されて露わになること」というイメージに立ち戻っておいてもよいであろう（なにしろ、今すぐにできるのだから）。その際に重要なことは「隠れた内部」を否定するのではなく、それを積極的に探し出し、その出来へ向けて何らかの手だてを打ちつつも最後は「待つ」という態度である。

5. 終わりに

モーリス・ドベスによれば、教育の目標とは、内部の否定と別のものの外挿によって教育対象を改変することではなく、あくまでも人間の内部にあるものを「引き出す」ことにあると言う。

「子どもを取りまく者、とりわけ教師が生徒に働きかける行動は、特に一つの解明的行動、つまり子どもの可能性を一つ一つ解き明かす行動のように思われる。(中略)教育するとは、この美しいことばの第一の意味が示すように、人間存在の中に潜在的に隠されていて、働きかけることがなければ陽の目を見ることのないかもしれないものを引

き出す (faire sortir) ことである。」(ドベス、1982、pp.9-10)

かと言って、「引き出す」ことも容易ではない。なぜならば、あるものは、内部も外層も含めて、それ自体のエコシステムを通して実現しているからである。そのエコシステムの存立に寄与していない外部がそこに働きかけたとしても、その機序は本質的な改変を被ることはないであろう。したがって、外部としての教育者は教育の対象を直接的に改変することはできない。潜在する可能性の発露は教育者のあずかり知らないところで起こるのである。

その者がどのような可能性をもっているのかわからないまま待ち続けなければならない上、潜在する可能性が顕れたとしてもそれは教育者や支援者の手柄ではなく単にその者を存立させるエコシステムが作動した帰結に過ぎない。表面的に見れば、教育や発達支援とは『ゴドー』と同じくらいに不条理な活動である。

では、意味のない活動なのであろうか？ そうではないであろう。会ったことのない者を男たちがただひたすら待ち続けるという奇妙な戯曲が今もなお人々の心をつかみ続けているように、子どもにも潜在する可能性が顕れるまでその子につきあい、内部の出来を待ち続けることに私たちはおのずから参加しているように思われる。戯曲を見る私たちは解釈の自由に遊ぶのだが、子どもを見る私たちもまた、可能性の自由に遊んでいるのであろう。

最後に、発達支援の「困りごと」「苦しさ」だけでなく、そこに底流する「楽しさ」に注目し、その内実をきちんと把握する必要があるのではないかという指摘をしてコメントを終える。

文 献

モーリス・ドベス 堀尾輝久・斎藤佐和 (訳) (1982). 教育の段階：誕生から青年期まで 岩波書店